

海船港

瀬戸内海クルーズにやってきた Spirit of Oceanus

文・写真 上川庄二郎



神戸港・中突堤に停泊するSpirit of Oceanus

【Spirit of Oceanusは、小振りのクルーズ船】
Spirit of Oceanusは、神戸市の姉妹都市であるアメリカのシアトルに本社を置くCruise West社所有のクルーズ船である。

四月二十九日に中突堤に入港したこの船に、神戸市みなと総局の計らいで、瀬戸内海クルーズ実現を模索する神戸経済同友会の有志一行が船内見学させてもらい、Malcolm Scalan 船長とAndy乗客対応ディレクターに案内していただいた。

船の概要からみてみよう。四、二〇〇総トン。乗船客は上限で一三八名、乗組員七十二名。巡航速度は、十四・五ノット（最大二十三ノット）。

船内に一步踏み入ると、まずはマホガニー材をふんだんに使った内装に圧倒される。なかなかのもの。船は小振りながら船内はこじんまりとした中にもゆとりを持った設計がなされている。パブリックスペースとしては、一二〇人は入れるメインホールとピアノを設えたラウンジがあり、ここには、バー、ライブラリー、メール・コーナーなどうまく配置されている。ダイニングルームも一二〇人がゆつくり着席できる。また、デッキフロアーにはジャグジーもあり、ランチも楽しめる。キャビンは、2〜6階に60室。広さは20㎡〜40㎡と比較的ゆとりがあり、全体が7ランクに分かれていて、上位3ランクはベランダ付き



メインホール



ピアノラウンジ



ライブラリー



メインダイニング



廊下



洗面・シャワールーム

となっている。バスルームはシャワー仕様であるが、クローゼットは広く取っている。これなら少々長旅にも十分対応できよう。一部のキャビンでは、ソファアーのエキストラ使用で、3人用として使えるなどきめ細かく、クルーズを満喫できそうだ。

【小型船の利点を生かして瀬戸内海へ】

小型船であることから狭い水路も自在に航行でき、積み込んでいるゴムボートで、何処にでも容易に上陸できるという小回りの利くクルーズ船という触れ込みである。

そのようなことから、Spirit of Oceanusは、昨年からは、神戸港を日本での母港として寄港するようになり、昨年は3回、今年は4回予定されているという。さらに来年は、神戸市の客船誘致策も功を奏して9回寄港するという。

昨年、今年のジャパン・クルーズは、神戸港↓瀬戸内海↓九州↓日本海↓新潟港を往復するコースで設定している。乗船客は、アメリカから飛行機で日本にやってきて、飛行機でアメリカに帰る。いわゆるFly & Cruiseである。

【アメリカ人に評価の高い瀬戸内海】

Cruise Westのパンフレットによると、「目を見張るように美しい瀬戸内海。歴史遺産が豊富でゆつたりとしたクルーズの楽しめる内海」と絶賛し、「ここを、Spirit of Oceanusの居心地の良いキャビンやラウンジでゆっくり寛ぎながら、日本の素


晴らしい景観に魅入ってください」。そして、「寄港地では、静かに佇むお寺や庭園を鑑賞しながら茶の湯を嗜み、お城や城下町などを見学してください。宮島では、伝統的な雅楽の装束に目を奪われるなど、きつと、好奇心を煽るような日本文化に接することができるでしょう」、「日本は、西欧の国々とは異なった歴史・文化を持つ美しい国です。寿司を始め日本食や日本酒も嗜んでみてください」、「Spirit of Oceanusは、瀬戸内海のような入り組んだ島々を巡るのに最適な船なのです。この小船で日本を発見するのが、日本を体験する最も良い手段です」と小船の優位性を説き、「本船には、日本語と日本文化の分かる博識のリーダーが、皆さんの仲間としていつも皆さんの身近にいます」等々と述べている。

【勇気づけられる瀬戸内海クルーズ】

今年、姉妹都市提携50周年を迎えるシアトルの船社が、このように日本文化や瀬戸内海を評価し、神戸港を日本の母港として活用してくれることになったことは非常に喜ばしいことである。地元神戸としても、これに勇気を得てユニークな瀬戸内海クルーズに取り組んでゆきたいものだ。



■かみかわ しんごろう
1935年生まれ
神戸大学卒。神戸市に在り、消防局長を最後に定年退職。その後、関西学院大学、大阪産業大学非常勤講師を経て現在フリーライター。



田崎真珠商会設立後
商売は順調に行っていたものの
火事によって事務所や
商品の大半を失った田崎は
もう一度、神戸でやり直すことを
決めた

海からの贈り物・真珠とともに生きる

日本の真珠王

~King of Pearl~ Syunsaku Tasaki Story

田崎俊作物語

〈第六話〉

漫画：佐藤晴美









値下げをしたりと
接待をしたりと
日本の真珠商は
外国人バイヤーに決して
強い態度をとることは
できなかった



敗戦から10年後の当時
日本の真珠商は
外国人バイヤーが宿泊する
ホテルに真珠を持ち込み
「買ってくれ」と頼むのが
普通だった



アメリカ人バイヤー
ローディン氏も
そうだった外国人の一人だった



ミスター・ローディン
この真珠は
キズもなく
照り・巻きともに
最高級品です



養殖場の苦勞を知っている俊作は
大切な真珠を買い叩き
手荒く扱われることに
我慢がならなかった

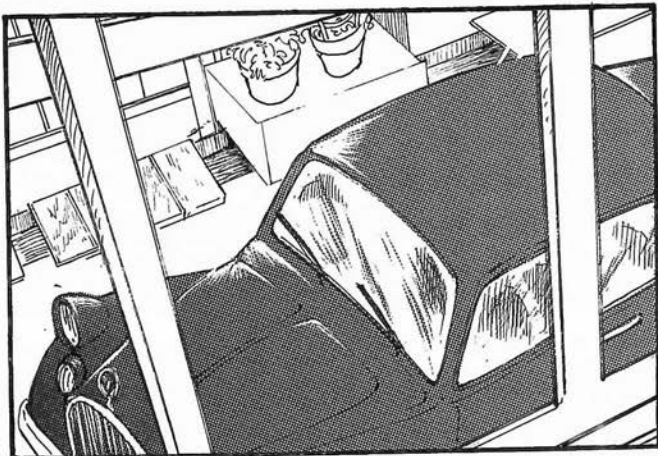
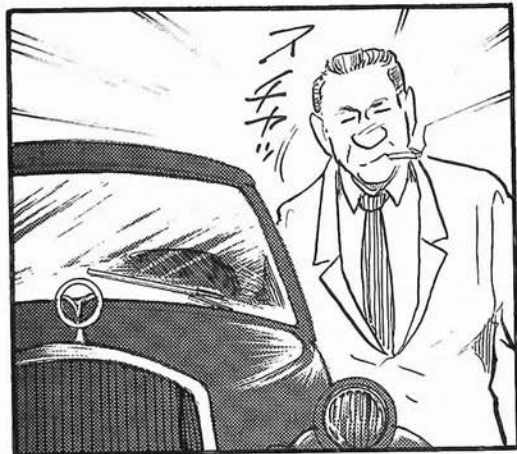
失礼するッ!

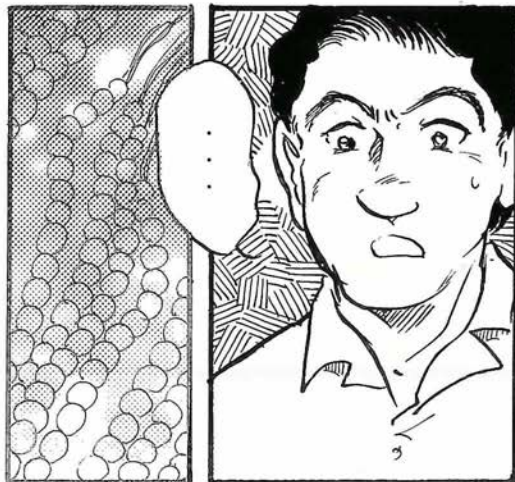
ミスター!
本当に良い真珠を
買うつもりなら
おれの家に来て
おれの真珠を全部
見てから買ってくれ!


こんなところでは
真珠の
良し悪しなど
わかるはずが
ない

おもしろい
じゃ
ないか


誰があんなやつと
商売など
するものか









田崎とローデインは
商売上だけでなく
友人同士としても
親しくなった



六甲山に出かけたり
日本文化を伝えようと
京都や奈良を
案内したこともあった



いつも一万ドル以上の
キャッシュがあるように
してやる
そのカネを元手にして
最高の真珠を買い集めて
加工したら
できあがったものは全部
わたしが買おう



田崎真珠が成長したのは
彼のおかげであるところが
非常に大きい——と
田崎は語っている
田崎の半生においても大きな
出会いであった

つづく

親子

出石 アカル

絵 菅原 洸人

題字 六車 明峰

夢うつつの向こうでチャイムが鳴っている。隣の小学校の、開門を知らせるチャイムが鳴っている。午前八時である。うちの開店時間である。「うわーっ、えらいこっちゃー！」である。

八時すぎには、モーニングのお客さまが見える。出社前にうちの店でコーヒーとトーストで腹ごしらえをして行かれるのだ。

転がるように店に降り、何はともあれ照明を点け、エアコンのスイッチを入れ、有線をかけ、扉を開ける。まだ顔も洗っていない。パジャマのままだ。

諦めて行きかけていたお客さまを呼び止める。あきれた顔で看板を出したり、ウエルカムマットを敷いたり、新聞をホッチキスで留めたりして開店準備を手伝ってくださる。

いつもは店の前を掃除したりしてから開店するのだが、そんなことはしてられない。

ガスコンロの火を点け、湯が沸くまでの間に顔を洗って着替えを済ませます。おしぼりポット、カップウォーマーのスイッチを入れ、お冷やポットに氷を入れ、浄水器から水を満たし、フレッシュミルク、トースト、バター、ジャムなどを素早く準備する。そのうち次々とお客さまが見える。午後と違って朝のお客さまはみな忙しい。あーあ、大変。こんなことが、年に、一、二度ある。時には間に合わなくて、「急病人でも出たのか思た」と心配させたり。ところが、わたしの寝坊だったと分かって、「マスター、ええ年して夜遊びが過ぎたんちやいまつか」と皮肉たつぷりのお小言をもらうことも。

この朝一番のお客さまの光田さん55歳は、以前にも登場してもらった、食品メーカーの営業マンである。

競馬が好きで、だけどこれまでの成り行きから奥さんに禁じられていて、それでも懲りずに隠れてやって大負けしてバレて、所持していたキャッシュカードをすべてハサミで切られてしまっていて、ただどうしても又行きたくて、取引先の結婚式に行くからと、礼服装て奥さんに祝儀用意させて出て行き、帰りにデパートで引き出物を作らせて帰って、奥さんを騙せたと思っていたら、競馬場での礼服装姿が目立って、近所の人が見えて、奥さんにご注進に及び、やつぱり又バレてしまった、という人である。

その人が、会社帰りに来店された話。

「かなんでえー。うちの親父やがな。元氣すぎるんや。心臓の手術したのに、元氣すぎるんや。もう82歳やで」

二回目の手術だったという。病院に提出する書類がたくさんあって、医者に文句たらたらだったと。

「承諾書を出す時やがな。主治医の先生に『こんなもん書かせて、また俺をモルモットにするんやろ』て、これから手術してもらう先生にケンカ売りよるんや。手術は無事に済んだんやけど、今度は付いてる看護師が気に入らんから替えてくれ言いよんねん。それは規則で出来ません言われても、指名料払たら文句ないやろ別の看護師にせえ、言いよるんや。昔のキャバレーとおんなじように思うとんねん。ほんま困った親父やで」

今は病氣も快くなつて、退院して元の一人暮らしだと。だけども心配なので時々はのぞきに行く。

「この前行つたら、テーブルクロスの下に写真を忍ばしとるんや。いろんなどこで女と写した写真が並べてあるんや。一人で鼻の下伸ばして眺めてるらしい。『親父、これなんやねん！』ゆうたら、『俺に親切にしてくれるんや。病院にもついて行ってくれるし、買い物にもついて来てくれるし、ええ人や』て言いよるんや。どうやら日本人ではなさそうな女で、40歳ぐらいや。そこでまた一悶着やがな」



ほんとに元氣なお父さんである。

このお父さん、むかし瓦葺き職人をしていて、38歳で奥さん（光田さんにとつては母親である）に死なれ、その後独り身を通したのだと。子どもたちがみな、結婚独立した後も一人暮らしを保つたのだと。だけどもある時、訪ねて行って鍵を開けて入ったら、若い知らん女の人が掃除していたことがあったのだと。

「いきなり目がパチつと合うてしもて。そしたら『どちらさまですか？』て言いよんねん。『そっちこそ誰やねん！』てなこつちや。そんな親父やから、何があつても別にびつくりはせんけどな。それが、写真を大事そうに片付けながら、『悪いけど十万円ほど貸してくれへんか』て言いよるんや。『その女に使うんか！』て怒鳴るか思たけど、やめた。あの親父は、俺ら兄弟を、一人で育ててくれたんや。そやけど生活は派手やつたし気前は良かったし、外で結構遊んどつたから金は残しとらん。国民年金だけではなあ……。今度の手術の金も俺が出したつたんや。そやけど腹立つで。俺はキャッシュカードも持たされてないのに、なんで82歳になる親父の女遊びの金、工面したらなあかねん。『絶対に返せよ』ゆうて、うちの嫁はんには内緒で貸したけど、返せるわけないんや」

■出石アカル（いずし・あかる）一九四三年兵庫県生まれ。「風媒花」「火曜日」同人。兵庫県現代詩協会会員。詩集「コヒーリップの耳」（編集工房ノア刊）にて、二〇〇二年度第三十一回ブルーメール賞文学部門受賞。

《神戸異人館物語》

夜明けの

ハンター



ハンター肖像

国境を越えた結婚

その日、平野常助商店はこれまでにないはなやいだ空気に包まれていた。長女愛子の婿がやってくるといふ大切な日なのであるから、店じゅうがごった返すのも当然だった。

「おまえたちもちつとはこましな身なりで婿殿をお迎えしなさいよ」

番頭が張り切つて陣頭指揮を取る。

「へい。承知致しております！」

掃除を終えた丁稚たちが、前垂れを外して、さっぱりと洗濯の行き届いた木綿の着物に着替える。自分のことでなくとも、こういっただおめでたは嬉

しい気持ちになるものだ。

主人の常助の感慨はひとしおだ。

「おとしの秋、高熱で死を覚悟していた愛子がまさか、花嫁になるとはねえ」

何度も目頭を熱くして、喜びを嘔みしめている。

「それにしても、英国人と夫婦にさせるとは、思いもかけなかつたですよねえ」

妻の菊子も不思議な運命が今なお信じられないといった面持ちである。

「来たぞ、来たぞ、まるで行列のようになって婿殿が来るぞお！」



三條杜夫
絵・谷口和市

様子を伺うために町に出ていた丁稚の一人が息せき切つて戻ってきた。大阪・天保山の船着き場から川口居留地の外れに当たる江之子島上之町まで、青い目の外人二人を中心に、七、八人の日本人が「団」となつて行列をなしてやつてくる様はまるで一幅の絵のような光景であつた。洋服姿の外人二人をはさんで、着物姿の日本人が整然と肅々と、おだやかな日差しに輝きながら歩を進めてくる。

「お迎えに上がりなさい！」

主人の一声で、番頭が丁稚数人を従えて外に飛び出す。近づいてくる兵庫からの一行を大阪方が待ち受ける。

「いらっしやいませ」

「お待ちしとりましたあ」

口々に歓迎の言葉を投げかけて、大阪方が兵庫の一行を平野商店に導く。

明治三年の初夏。ハンターが平野愛子と結婚することとなった。ハンター28歳、愛子20歳。英国人男性と日本人女性の結婚で、のちにこれが日本における国際結婚第一号と言われるようになるが、この時点では日本国家としての憲法もなければ、戸籍法もないので、婚姻届けなどの手続きを行う必要もなかったことは説明するまでもない。戸籍法の制定を明治政府が発令する明治4年4月4日までにはちょうど一年ある。

この時代は結婚式という風習もまだない。兵庫県が生んだ偉大な民俗学者・柳田国男の説をもつ

としても、明治のこのころは、今という嫁入りの風習は江戸時代までの武家の慣習は別として、一般庶民の間には生まれておらず、「婿入り婚」という形式が多かつたという。婿入り婚とは男性が女性の家に通う形式で、一定期間、妻となる女性の家に男性が通うというものである。男性の家に女性が「嫁入り」するのは男性の母親が家事一切の権利を嫁に譲る時で、嫁入りまでに時間がかかることが多いことから、必然的に子供を産んでからの嫁入りも珍しくなかつたという。

江戸時代まで武士の社会では「嫁入り婚」が行われ、家を継ぐ子供を産むことが女性の重大な任務であつた。いずれにしろ、結婚式という儀式はまだ誕生していなかつた。ここで、今に見る結婚式がどのような過程で形成されていったのかを考察すると、その発端は明治政府がヨーロッパ諸国に比べて遅れた文明の差を縮めることを自らの課題としたことに起因する。日本の文明が何故遅れたのかということを研究するために岩倉米欧使節団が世界を回り、まとめた結論が教育を充実させることと宗教を持つことだった。特に建國わずか百年にして、歴史の長い日本より優れた文明を築き上げたアメリカに刺激されて得た結論だった。そんな中から教育制度が生まれ、国家神道が作られ、そんな背景のもとで神前結婚式が生まれていくのである。

ハンターと愛子の結婚に当たって、どこに世帯

を構えるかということが関係する人たちの間で話題となった。

「留吉サンニ建テテ貰ッテイル洋館ガ完成スルノヲ待ッテ、ソコニ住ンデ貰ウノガ当然デシヨウ」
キルビーが十四番館の提供を申し出た。ピジネス仲間、それも上司としての責任においても妥当な申し入れだった。

「アリガトウゴザイマス。ゼヒ、ソノヨウニサセテイタダキタイデス。シカシ、洋館ニ住ム前ニ、少シノ間、平野ノ家ニ住ミタイデス」

ハンターはきわめて日本的な風習を重んじた。米田が言葉添える。

「素晴らしい考え方です。ミスターハンター。郷に入りては郷に従えという諺が日本にはあります。西洋人のハンターさんが私たち日本の風習を理解して下さるのは何より嬉しいことです。婿入りという形でスタートして、しばらく後に改めて嫁入りという形で、愛子さんを兵庫に招いて居留地に住んでもらうのがいいでしょう」

米田の意見に反対する者はいない。むしろ、留吉などは「いやあ、さすが米田先生、素晴らしい提案です」と、感動する。

こんなわけで、ハンターは日本の庶民の風習に従って、まず、婿入りをすることとなった。大事なピジネスパートナーの運命を決める瞬間に立ち会いたいと、キルビーがお供をすることを申し出た。

「あつしたちも平野家を一度見ておきたいですよ。ほんの少しでいいから、おじゃまさせていただきますってわけにやいませせんかね」

留吉が言った。稲次郎も

「ハンターさんがベターハーフとして選んだ女性の生まれ育った家をぜひ見たいです」

と希望し、米田のとりまじめによつて、キルビーのほか、留吉の家族三人、秋月清十郎、米田の6人が婿入りのお供をする結果となったのである。

「いやあ、すごい威厳のあるお家ですねえ」

平野家の前に立つて、稲次郎が素直に感動する。元武士の秋月も

「さすがです。商人の誇りがにじみ出た立派な家です。英国生まれのハンターさんが、こんな日本の格式を誇る家とうまくお付き合いなさるものですねえ」

と、不思議な表情になる。

「ようお越しやすす！」

番頭を筆頭に丁稚たちが居並んで、一斉にお辞儀して、一行に歓迎の意を表明する。

一行が通された座敷から見る庭にすいせう忍冬の花が咲いている。(これがハンターさんから聞いていたカップリング・フラワーだな)と稲次郎は思う。床の間には鶴が舞う絵が描かれた軸が飾られて隅々にまで行き届いた気配りが感じとられる。

やがて、主人常助が姿を見せ、正装に威儀を正して挨拶する。

「ハンターさん、そして皆さん方、本日はお揃いでようこそ遠路はるばる浪花の拙宅までお越しいただき、誠にありがとうございます。特にキルビー様にはハンターさんと私どもの娘愛子が所帯を持つことに理解を示していただき、恐縮しごくに存

じます。ハンターさんには、どうぞ末長く、愛子をかわいがつて下さいますようよろしくお願い申し上げます」

丁寧な挨拶を受けて、米田が一行を代表して言葉返す。

「ご丁重なるご挨拶、感謝のみぎりに存じます。ご縁あつてイギリス生まれのハンターさんがこの日本で、愛子嬢とめおととなつてこれからの人生を共に歩んで行かれることとなりました。国の違いはありません、人が人を想う気持ちに垣根はないと私は信じます。平野家の皆様方におかれましては、どうぞ、お二人を何かとご支援たまわりますよう、心からよろしくお願い申します」

兵庫方の一行が正座のうえ一斉に頭を下げる。「こちらの方こそ、よろしくご指導のほど心からお願ひ申し上げます」

大阪方も畳に額をすりつけんばかりに丁寧な礼を返す。母菊子に手を取られて、愛子が姿を現した。一張羅の着物に身を包んで、いつもとは異なる面持ちで、今日のこの瞬間がいかに大事なもののかを実感させる雰囲気である。菊子がやおら膝を折つて、正座し、三つ指ついてもむろに口を開く。

「愛子の母にございます。ふつつかな娘ではございますが、なにぶん末永くよろしゅうおたのみ申します」

母親の言葉に合せて、愛子が同じように三つ指ついで丁寧にお辞儀する。

「愛子サン、チヨット、私ノ言葉聞イテクレマスカ？」ハンターが立ち上がると、愛子のそばに歩み寄

つた。

「私ノ国デハ、大事ナ時、神ニオ祈リシマス」

ハンターはものごころついてから十五歳まで過ごしたアイルランド・ロンドンデリー州での生活を思い出した。大事な時、大人たちが真剣に神に祈る姿を少年ながら目にした光景が脳裏に鮮明によみがえる。こういう時こそ、神に誓いを立てるべきだと、ハンターは考えたのである。自分流にハンターは愛子の前にひざまづく、愛子の手を取つて、祈り始めた。

「天ニマシマス神サマ、私ハ今、コノ日本女性ヲ妻ト定メ、新シイ人生ニスタートシヨウトシテイマス。ドウゾ、彼女ヲ幸セニ導クコトガ出来マスヨウ神ノ御名ニオイテオ守リ下サイ」

愛子はどうすれば良いのかわからなかった。ただ、ハンターのなすがまま、じつと祈りに耳を傾けていた。

「愛子サン、私ト生涯、幸セニ暮ラスコト、約束シテ下サイマスカ？」

「はい、約束します」

無意識に愛子は言葉を返した。はるかこの時代に結婚式で交わされるようになる誓いの言葉である。ここで留吉がしゃしゃり出た。

「日本におめでたい時に唄う歌があります。少し私が唄つてよろしいでしょうか？」

みんなの拍手が起こつた。留吉は仕事をしながら色々な歌をよく口にした。江戸の木場で筏師が口にした木遣りとか、粋な世界で唄われる謡曲のさわりなど、大工仕事のなぐさみに覚えた歌の中

から留吉は謡曲「高砂」を選んだ。いつもとは異なり、鼻歌まじりではなく、留吉は毅然と胸を張って、堂々と唄い始めた。

「たかあさごやあゝ このうらあふねにいゝほをあげてえゝ・・・」

兵庫の西、明石を越えて、加古川のさらに西、播州高砂に翁と媪がいて、共に白髪を生えるまで仲睦まじく暮らしたという内容の謡曲である。こういう場にはびつたりな歌だと留吉は考えた。得意の喉が役に立った。長い歌なので、適当なところで、唄い納めると、留吉は

「これにて、ハンターさんと愛子さんのご祝儀相い整いました。ご両人、そして皆様、誠におめでとうございませう！」

と声高々に口上を述べた。留吉は家を建てるのが得意なだけではなく、こういった儀式ばったところの場持ちでもまた意外な力を発揮したのである。居並ぶ誰もが無意識に心から拍手した。感動で思わず目をうるませた常助が番頭に命じた。

「さあ、酒を出しなさい。御膳も頼みますよ」

かねてより申し合わせていたのだろう、丁稚たちがきわめて手際よく、酒肴を運び入れる。米田が提案する。

「僭越ながら私が今一つの儀式を提案させていただき、皆さんにご協力をお願いしたい。欧米はもとより、同じアジアの中国にも酒を飲み始める時の作法があります。中国で戦いが続いていた時代、皇帝や王侯がこの酒には毒が入っていないことを示し合い、しばし、休戦の意味も持って杯を一斉

に挙げ、同時に飲むという儀式を行ったと言われています。この儀式をここで、私たちも見習いたいと考えます。私が『おめでどうございませう』と言いますから、皆さん、一斉に唱和して下さい」

丁稚たちが盃を皆に配って、酒を注ぐ。稲次郎にも盃が配られる。十八歳が未成年だとする法律はこの時代には制定されていないし、この時代、十八といえはもう立派な大人として扱われた。ハンターには一番に盃が手渡されたのは言うまでもなく、愛子も盃を手にした。丁稚たちも喜びを味わうために、盃を持つことが許された。さすがに愛子の妹三人と弟一人は茶を入れた湯飲みを手にして、米田の音頭に従う。

「それでは皆さん、本日はハンターさん、愛子さんの御婚儀、誠におめでどうございませう！」

米田の言葉に続いて皆が一斉に

「おめでどうございませう！」

と唱和する。思い思いに盃を挙げ、そして飲む。今という乾杯である。この十三年後の明治十六年、東京日比谷（現在の帝国ホテルの隣）に鹿鳴館が誕生し、舞踏会が華々しく開催されるなど、西洋流社交術が根を下ろすことによって、パーティーの始まりに欠かせぬ乾杯の儀式が浸透を始めるが、ハンターと愛子の周辺では既に、時代の魁となることを無意識のうちに必要にせまられてごく自然に行っていたのである。それほどまでに、英国人・ハンターと日本人・愛子の国境を越えた結婚は画期的なものであった。



通岸地尼雑

薬種問屋・平野常助商店に青い目の婿が来たという噂は、すぐに大阪中を駆けめぐった。その婿はもとはと言えば、女性の命を助けたことが縁で夫となったものであるという詳しい話しも、興味津々の世間話となって瞬く間に知れ渡った。それほどまでに力を持った人が婿入りした平野の薬はよく効くと評判になり、平野商店の売上が急増するのであった。そのことはつまり、薬品を卸すキルビー商会の売上もまた伸ばすこととなる。

ハンターが大阪で暮らす間、小野浜鉄工所の舞鶴丸建造工事の指揮は秋月が取る。ハンターの代理であることを意識して、秋月はことのほか、意欲を燃やした。

居留地では留吉が十四番館の仕上げに余念がなかった。完成後、ここにハンターと愛子が住むのかと思えば、いっそう張り合いがある。

「たかあさ〜やあ〜」

大阪でみんなの前で唄い上げた得意の歌が思わず口に出る。片腕となつて父を助ける稲次郎が「父さん、他の歌も歌つたら？」

とひやかす。ゆるやかに時が流れていく、明治三年のハンターと愛子の周辺であった。 つづく



■三条杜夫（さんじょう・もりお）
フリーアナウンス、放送作家、ルポライターを経て、放送業界へ。経歴にもとづく地域活性化講師としての活動も評価されている。著書に「いのち結んで」「室の道七福神めぐり」「そうゆう人たち」など。